

『壺中天酔歩』

中国の飲酒詩を読む

沓掛良彦著

大修館書店

「壺中天」とは、後漢の費長房が市場役人をしていたとき、市場の薬売りの老人が、商いがすむと店先に掛けていた壺の中に入るので、翌日老人に頼んでその壺に入れてもらうと、壺の中は旨い酒肴がある宮殿であった、という故事から、別世界、別天地、また酒を飲んで俗世を離れた気持ちになることを意味する言葉である。

本書は壺中物、即ち酒を愛し、詩、とりわけ「中華飲酒詩こそは世界の至宝である」と中国の飲酒詩をこよなく愛する著者が、「唐土の仙人に倣ってそろそろ酒壺の中へと入り、あちらの飲酒詩を賞で、こちらの詠酒詩を吟味し、ときには西方の酒の詩などにも目をくれつつ、詩酒の香り漂う壺中天をよほろい歩くこととしたい」と、中国の詩の世界から酒の詩を取りだし、そこに見られる詩人の酒境、詩境、そして詩酒の深い交わり具合について語った書である。

飲酒詩といってもただ飲酒の楽しみが詠われているだけではない。壺中の世界は広大無辺。本書には時代で言えば、中国最古の詩集『詩経』から清末の女性革命家秋瑾の詩まで、また詩境で言えば、「天若不愛酒 酒星不在

天 地若不愛酒 地応無酒泉 天地既愛酒 愛酒不愧天
 (天若し酒を愛さずんば 酒星天に在らず 地若し酒を愛さずんば 地応に酒泉無かるべし 天地既に酒を愛す酒を愛するは天に愧ぢず・李白)と飲酒の正当性を高らかに詠った詩から、「酔別千厄不流愁、離腸百結解無由(酔別千厄なるも愁を流がず 離腸百結して解くに由無し・魚玄機)と男に捨てられた女の胸の張り裂ける思いを詠った詩まで、この世に生きるものが抱いてしまう様々な思いが酒とともに詠われた、実に多種多様な詩が収められている。

本書に収められている中華飲酒詩はもちろん絶品揃いであるが、中華飲酒詩だけに興味があるのであれば、著者枯骨閑人が枕頭の書としていう青木正児著『中華飲酒詩選』を繙けばそれで足りるかもしれない。しかし本書は単に中華の飲酒詩を集めただけの書ではない。

古今東西の詩の世界に精通した著者は日本の飲酒詩、西洋の飲酒詩をも引きながら、時空と空間を越えて縦横に、自由自在に、めでたく詩酒合一の成った中華飲酒詩の世界を逍遙飛翔する。本書を繙けば著者の軽妙洒脱、芳醇な酒香の漂う語り口に案内されて「酒杯を片手に、広大無辺な中国の飲酒詩の世界を著者とともに酔歩(あとかぎ)できること請け合いです、その心地よさ・楽しさは本書ならではのものである。

そればかりではない。本書はまた著者が半生にわたって酔吟しつづけ、もはや著者の血肉と化している「中華飲酒詩に寄せる思いを吐露」(あとかぎ)した書でもある。

著者は中国の詩人たちが飲酒詩に込めたこの世に生きていく上での様々な思いを読み解いていくが、それはまた当たり前のことではあるが、著者自身の酒と詩に寄せる思い、人生に対する思いを語ることともなっている。本書は著者枯骨閑人が自らを語った書としても読めるのである。著者を知るものにとつては、このことも本書の見逃せない魅力である。「中華飲酒詩人の宗」東晋の醉吟先生即ち陶淵明および詩仙にして酒仙たる李白をはじめとする唐の詩人たちの詩を論じた部分が全体の半分を占めるが、血肉化の度合いによるのであろうか、この部分が特に面白く読めた。

寂しいことに、壺中天を自由に逍遙し飛翔する枯骨閑人こと本書の著者沓掛先生は本年三月を以て本学をご退官である。雑事に心を煩わせることなく思う存分中華飲酒詩の世界・壺中天で逍遙されんことをお祈りしたい。

蘇軾は「得酒詩自成（酒得れば詩自ずから成る）」と詠ったが、瓶蓋病を病み、時には「欲言無予和、揮杯勸孤影（言わんと欲して予に和するもの無し、杯を揮いて孤影に勸む・陶淵明）」、また時には「何以解憂 惟有杜康（何を以て憂いを解かん 惟だ杜康有るのみ・曹操）」と都合のいい中華飲酒詩の詩句に力を借りて酒を食らい、「三百六十日 日日醉如泥（三百六十日 日日酔いて泥の如し・李白）」という状態の非才浅学の身であれば、「別語纏綿不成句（別れの語 纏綿として句に成らず・黄大臨）」、気のきいた送別の言葉も浮かばない。その昔唐土にあつては王維の七言絶句「送元二使安西」に曲がつけ

られ、送別の歌として歌われたという。胸に沸々と沸き起こる惜別の情は昔も今も変わることはなからう。されば唐土の人々に倣い、渭城曲とも陽関曲とも呼ばれるこの惜別の詩を引き、以て別れの挨拶とさせていただきたい。

渭城朝雨浥輕塵

渭城の朝雨輕塵を浥し

客舍青青柳色新

客舍青青として柳色新なり

勸君更進一杯酒

君に勸む更に一杯の酒を尽せ

西出陽関無故人

西のかた陽関を出づれば故人無からん

（小林二男）